

1985



高崎高校同窓会報

発行所
高崎高校同窓会
〒370
高崎市八千代町
2-4-1
TEL
0273-24-0074

第19号 昭和60年11月30日





輝かしいわが高高的の姿

同窓会会長 原 一雄

二年の後に九十周年を迎える私達の母校高崎高校が、学校当局及び同窓会、PTAの一致した絶え間ない努力により、現在校風は毅然として正され、学科に於ても体育に於ても、またその校内の整備された姿に於ても、最もよい状態にありますことは、誠に同慶に堪えない処であります。

先に野球部の初めての甲子園出場に際して寄せられた寄付金を基礎として発足した、財団法人翠辮育英会は既に第一回の育英資金授与が九人の生徒に行われました。NHKが、テレビ放送によって授与式の状況を特集して放映致しましたが、同時に高高的の現況や生徒の応援歌を唱う姿も映されました。育英資金はその規約によって、返済することはなくともよいとしておりますが、受けた生徒がその意義に於いて将来成功した後に、この育英資金に自分の寄附をすることは妨げないともなっております。受けた生徒からは当日、将来必ず成功してこの基金に恩返しさせて貰いたいとの力強い感謝の言葉がありました。わが高高的に育英の一つの理想の実現があった事は、全国でも稀有の事とNHKが認めてとりあげたのであります。

また本年の同窓会の総会は、五十四期の卒業生の企画推進によりましたが、六百人を越す大盛会となり、これ以上となると開く場所にも苦しみというまでになりました。この事は、同窓会活動の盛んなことを示すばかりでなく、同時に各期の団結に力を加えるものと喜ばしい限りであります。一

九六一年は五十五期の主催であります。よろしくお願い致します。

更に京浜高高同窓会を始め、各地域職域の同窓会の集りも夫々に整然と確実に行われております。この同窓会報も、現在一万七千も印刷され、住所のわかる全ての卒業生のもとに確実に送付されております。その為お蔭様で同窓会費の納入も次第に増加しておりますが、更に一段と母校と同窓会に御関心をおかけ頂き、御送金下さいます様お願い申し上げます。

またいよいよ九十周年の記念事業実行委員会も発足致しまして、その募金活動も始まりますが、十年に一回のこの機会に何分の御協力をお願い致します。

同窓会がこの様に母校を軸として不断の改善発展を致しておりますが、これは偏に各役員、会員の御努力と共に、その陰の力として本部幹事の皆さんの活躍があります。卒業生の先生である校内幹事と校外の少壮の先輩による本部幹事が、同窓会活動の根本の企画と常任理事会の決定の議案の推進実行を計ることにより、同窓会活動が進展しておりますことに敬意を払う次第であります。

尚高高的に於ては、戦後永い間に亘って、日本一流の優れた人々によって生徒に講演して貰う歴史がありました。主として井上房一郎先輩の力による処が多かったのではありますが、私の列席した講演者を数えても、小泉信三、安倍能成、矢内原

◇高々同窓会報No.19目次◇

輝かしいわが高高的の姿 同窓会会長 原 一雄 2
ごあいさつ 学 校 長 水穴再喜 3
ご挨拶 副 会 長 岡本正巳 4
高崎高校教育後援会長就任のご挨拶

私の高中時代 特別寄稿 思い出と近況 安藤文夫 5
S 先生のこと 吉野五郎 6

ずいそう 本ものの味を伝えたい 大林勝典 7
●私の回想記 羽鳥昇兵 8

柔道と絵と詩 中野完二 9
校歌翠辮によせて 生方将夫 〃

八年後の、高々。 橋爪恒二郎 10
忘れ得ぬこと 山下勇次郎 11

卒業生の作品紹介① 半田富久 〃
論壇 〃 親馬鹿ちゃんりんの志操 井田進也 12

●同窓会だより 〃
榛名地区同窓会だより 土岐 正 13

京浜同窓会の近況 上利嘉野 13
三八会クラス会便り 清水幸正 14

「北本すいらん会」 重田精一 〃
財団法人翠辮育英会発足 原田 修 15

第39回高高・前高定期戦 田中 順 16
運動部報告 前川浩三 17

最近の進学状況について 中原射鹿止 18
森 慶寿 19

翠辮文庫 17
会計報告 〃 19

第八四会高々同窓会新年総会へのお誘い 〃 20
事務局だより 〃 〃

〈表紙〉岩山 猛 (49回)

忠雄、蝦山政道、湯川秀樹、松下幸之助、水上達三、梅原猛氏ら錚々たる人達であります。青春の血を燃やし、これからの人生を何によって生きてゆべきか、その出発点に立った若い生徒達にこの講演は深い意義を与えたものと思います。同窓会に於ても今後とも、こういう若い人達の進むべき前途の運命に関わる様な大切な機会を作る優れた人々の講演を、学校にも希望すると同時にその実現の爲の後援を實行したいと考えております。

わが同窓会には、その時点時点の運命の推移によつて高崎中学、高陽中学、定時制、通信制、高崎高校とそれぞれの卒業の別はありますが、同窓会に於ては卒業生は全て同一、一色の同窓会員であります。先輩後輩の別はありますが、それこそ老いも若きも渾然として一堂に会して語りあい、校歌や翠樹の応援歌等を合唱することは、人生の生き甲斐にも通うものがあります。

またわが同窓会には、現在百名にも及ぶ、永い苦心によつて通信制の卒業をした女性の会員が求められることも忘れることは出来ません。この方々が進んで総会に多数出席されて華を添えておられることも、胸暖まる思いがするのであります。

更に高高には、PTAと並んで、PTAのOBの方々を中心とし、同窓生の先輩をも交えて、高崎高校教育後援会が今年から発足しております。会長は児玉貴さんですが、同窓会とも相たずさえて母校を充実させる為の活動を始められましたことは、これまた喜びに堪えない処であります。

わが高崎高校は、福田越夫、中曾根康弘と二人の総理大臣を世に出し、現在四人の国会議員を出しているばかりでなく、中央地方を通じて政界、財界、経済界に於ても日本の運命を担う様な人達を世に送っております。また土屋文明の如く現歌壇の最高峰の人を始めとして、学界、芸術文化の

世界、体育等のすべての世界に名だたる人々を世に送り、一地方高校の高高が全国にその名を唱われている事も、私達の輝かしい誇りであります。

これから高高を卒業される若い人達は、この先輩達が何によつて世に名を成したか、よく考えて貰いたいと思います。生涯を貫く学問、知識と体育によつて鍛えられる体力は、もとより大切であります。最も重要なものは、その学識、体力の根元を為す清潔剛健な精神の背骨であります。苦しさに会えば会う程、粘り強く立ち向う意気と不正に組まない反骨の精神こそわが高高の根本であります。母校のいよいよの進展を祈つてやみません。

(29回)

あいさつ



学校長

水穴 再喜

同窓会員の皆様には、常日頃より母校のために並み並みならぬご尽力を賜わり、衷心より感謝申し上げます。会員の皆様の力強いご支援の下、職員生徒一体となり、日夜研鑽を積んでおります。

さて、本会報に紙幅を与えられましたこの機会に、私が常常考えております、「高高の教育」について、所懐の一端を申し述べ、皆様の一層のご理解とご協力をお願い致しますと存じます。

昭和五十七年四月、本校校長を命ぜられ赴任致します時に、私の胸中には、一つのテーマがございました。それは、「高高の教育」を通じて、広く日本の教育のあり方を考えてみようということでした。この年の三月まで、社会教育課長の職や高等学校長の職を歴任して参りました私は、日本の教育が曲り角にさしかかっていることを実感として感じておりました。生徒の多様化、社会の複雑化、物質万能の風潮、青少年の無気力、無感動、まさに教育は曲り角に米ておりました。私は、自分の歩んで来た道を振り返り、将来の日本を思う時、これら難問を前にして、いたずらに拱手傍観することは許されないことを知っております。

幸い高崎高校は、八十有余年の光輝ある伝統を持ち、幾多の人材を輩出した北関東有数の名門校であります。またつぶさに校内を見ますと、充実した施設はもとより、教員の意欲の高さ、生徒の学習意欲の強さ等、私のテーマを追究するのに申し分のない条件が揃っております。教育者としての己の有らん限りを、高高の中で燃やし尽くす覚悟を私は定めました。

以来、三年余りの歳月が瞬く間に過ぎ去りました。教育の曲り角は、今やその極に達し、奇しくも本校出身の中曾根総理大臣の下に、臨時教育審議会が教育改革の提言をするまでに至りました。翻って高高の教育はどうでありましょうか。毎年行われる県高校総体での成績、大学合格者数、また教師と生徒との厳しい切磋琢磨と暖い結びつき等、高高には、教育の曲り角はないかのように見えます。しかしながら、いつの時代、いかなる所にあるとも、歴史の流れに波打ち寄せられぬ岸辺はありません。高高に、歴史の大海が打寄せる前に、われわれは、確固とした信念に基づき理想

の学園を築かなくてはならないと思います。時あたかも、同窓会におかれましては、財団法人翠嶺育英会を設立され、広く郷土の英才を世に送らんとされております。また九十周年記念を二年後にひかえて、その準備が着々と進んでいるやに伺っております。高々の未来は明るく開けております。

歴史の波に耐え、明日を目指す、「高々の教育」のために、会員の皆様、ますますのご尽瘁をなにとぞお願い申し上げます。

末筆ながら、同窓会各位のご健勝とご多幸を心よりお祈り致しまして、ごあいさつと致します。

ご挨拶



副会長
岡本 正巳

時間的にも精神的にも自分の人生の大半を高崎中学、高崎とその同窓会の発展のために捧げた人と自他共に認めて我々の敬愛の的であった故真下秀夫先輩はそのお人柄だけでなく、ふるい高崎中学卒業生の共通の恩師でもある土橋先生の御子息という立場もあって、東京でも、高崎地区にあって、無くてはならない貴重な、また名物的存在でありました。

私が京浜地区の副会長に指名された立場から機械的に、本部におかれた副会長の席を汚すことは長い年月にわたって地元において地味な、しかし熱心な御努力を重ね、着実に成果をあげてこられた諸先輩や同輩、後輩の方々に対し誠に心苦しくもあり、真下さんなるが故に地元の人達が東京代表によせて下さった御好意に私までが甘えてよいものかどうか不安にかられるところもあります。

昭和九年に第三十三回卒業生として上和田の学び舎を後にした私にとっては輝く長い伝統とことわるまでもなく母校の歴史のもつ重みを知りつくしている訳ではありませんが、新たに同窓会に関係する一員として、初心にかえって持ち場を良心的に守りたいとおもっております。どうか前副会長に示された御好意と御指導をお願いいたします。

私はよく同窓会の挨拶にたたされる時、わが高崎同窓会を支えてきたのは学校時代の悪童や劣等生であるなどと放言して一部の人達の失笑をかったりしておりますが、このような私の同類がいわゆる優等生と違い、学校生活が単に教室の思い出しに止まるものでなく、運動場、図書館、喫茶店、映画館、女子校、友人宅、高崎市、全体を含めた広い世界の息吹にまつる喜び、悲しみ、苦しみ、悔恨の集大成であって、授業はほんの一部の構成要素にすぎなかったと信じているからです。課業の終わりは実はその日の学生生活の開幕であって、したがって、彼等にすれば卒業は真に高崎中学、高校生らしい自覚に目覚める契機であったかも知れません。

私も人生の黄昏にきてそのような自覚を新たにもち得たかも知れません。そして母校愛に満ちた活動がおこなえることを自分に期待してご挨拶にかえさせていただきます。

(33回)

高崎高校教育後援会長

就任のご挨拶



児玉 貴

同窓会員の皆様には、ご健勝にてお過ごしのことと拝察致します。

このたび、端無くも、高崎高校教育後援会長をお引受けすることになりました。この機会に、同窓会報の紙上をお借りしまして、会員の皆様に就任のご挨拶を申し上げ、あわせて本教育後援会の設立に至った経過とその目的をお話し申し上げ、今後のご援助、ご協力をお願い致したいと存じます。

実は、昨年来、本校PTA会長経験者の有志の集いなどが持たれました折に、何かしら現在のPTA活動に協力できる方途はないものかとの意見が、誰言うともなく起ってまいりました。なるほど高崎高等学校は、同窓会の諸兄やPTA会員の絶大な協力によって、他に類を見ないような施設設備を擁してはいる。しかし、日進月歩の世の中にあつては、教育施設、教育機器もその例外ではない。次代を担う高生には、できる限り優れた教育環境を整備してやりたい等々の意見が沸き上ってまいったのでございます。

こうして、本年一月に、設立検討会が開かれ、同窓会関係者有志、歴代PTA関係者有志、また、学校側の関係職員などが、本会設立の具体的な検討に入りました。

その後、会則の審議、会費の検討、役員の人事など懸案事項もスムーズに解決し、二月十五日には、設立總會を開くことができました。さらに、五月十五日には、PTA總會において、本教育後援会加入の決定を見、六月五日には、役員總會開催と順調に歩みを進めてまいりました。これも一重に、本会に関係されている、同窓会・PTA等々の皆様のご協力の賜物と心より感謝致しております。

さて、本会の目的は、会則の第2条にあります通り、「本校の各種教育活動の推進および環境整備のための諸事業を後援すること」となっております。よりよい教育環境の下で、より質の高い教育を受け、個人の幸福と国家社会の繁栄のために力を尽す人たることは、本校生徒の望むところだと思えます。本会は、こうした高の教育活動を後援し、その環境整備に尽力したいと考えております。

また、会員は、「本校の現、旧PTAおよび同窓会の関係者の有志と、特に本校の後援に協力しようとする篤志のある者」となっております。同窓会員の皆様、特段のご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。所以でございます。

現今、教育界をつぶさに見ますと、まことに多事多難、座して結果を待つには忍びないものがございます。幸い、わが高崎高校は順風満帆、教育の混乱はどく風でございます。しかしながら、このように順調な時にこそ、腰を据えて、高崎百年の計を考えなければならぬのではないのでしょうか。本教育後援会が、その一助となりますれば、誠に幸甚の至りでございます。

（高崎商工会議所会頭 47回）
榎小島鉄工所会長

●特別寄稿



私の高中時代

安藤 文夫

私は昭和三年に高崎高校（当時は中学校）に入学し、八年に卒業した。従ってその期間はあげていわゆる昭和初期の大不況の時代であった。が、幸い後世伝えられているような厳しさは少しも感ぜず、無事学校を卒業することができた。今から考えると、随分呑気な話だが、改めて両親に

感謝しなければいけないわけである。当時我が家は高崎の中心地、「お江戸見たけりや高崎田町」てくすり屋をやっており、中学校は市の北部の下和田町にあった。田町から映画街で賑やかだった新紺屋町、左に曲って嘉多町を通り、高崎神社の境内を抜けて、軍人や役人の官宅が多い四ツ屋町を経て学校に到着した。

田町には、私（みいちゃん）、瀬下の辰ちゃん、川村の泰ちゃん、三ちゃん、がいて毎朝誘い合い、途中花柳界のある柳川町通りを片目に見ながら、時にはデイクシヨナリーを片手に英語の単語を教え合っていたものである。

校舎は木造でもう随分と古かった。教室のあった建物は二列に並び、外に控室といって屋内での全校生徒の朝礼や休み時間の溜まり場などに使われた。校庭は野球場、その傍らに相撲場があった。そこでよく上級生が下級生に制裁を加えたものである。

校庭の西側に寄宿舎があり、その前にクローバーの生えた芝生があった。入学初々の我々を全員座らせて、五年生のボスがいかめしげに説教したのを覚えている。寄宿舎の向うは小島鉄工所だが、不景気だというので、仕事がなく、トントンカンという鐘の音もなく、ひっそり返っていた。私は在学中余り身体が丈夫の方ではなかったし、運動神経のある方ではなかった。つまり、平凡な中学生であつた。四年生になった春休み、市郊外の井野村に御霊神社があり、境内に火祭りの行事があった。それを見ての帰り、風邪をひいて寝込んだ。その後一向に微熱が下がらず、お堀端の佐藤賢医師から胸尖カタル（今様には胸結核）と診断され、とうとう一学期は休学するはめになった。以来、昭和十四年十二月兵隊にとられ、仙台予備士官学校を卒業、陸軍少尉に任官するまで、「俺は肺病だ」というコンプレックスが抜け切らず、総べてに消極的になった。特にそれが教練、体操にあらわれ、体操担任の富田さん、塚越栄ちゃんからは点数がなく、教練が丙、体操が丁という有様で、いよいよ学年順列を下げた。

特に五年生になって関西旅行でカフエーに入ったのが見付かって二週間の謹慎処分を受け、操行までが丙となり、とうとう卒業成績は一〇八人中の五八番という順列になった。こうした成績はあとあとまで影響し、「俺は頭が悪い」と脳裏にこびりつき、復員後東芝に戻らないで、高崎で父業を継いで、今日に至ったのもそうしたことが起因している。

そんなことで、私が東京商科大学（現一橋大学）を受験するといったら、英語担任の栗原のこちなど先生たちが「安藤なんか合格するものか」と大笑いし、私は「そんなこといって、やってみなければ分らない

じやあないか」と抗弁した。確かに合格して大学予科に入学してみたら、皆秀才ばかりで、五八番という成績は私だけだった。それでもお蔭で一学期は丙だった操行も二学期には乙、合格したら三学期には甲になっていた。

当時校長に樋口虎さんという人がいた。口髭を生やし、恰好が良く、堂々たるものであった。高崎中学校は前橋中学校と同じく県下の名門校で、卒業生は当時難しいといわれた一高やら商大、工大という名門大学によく入った。それだけに四年生から受験学級というクラスがあつて、受験専門の勉強をした。学校の普段の試験とは別に受験科目の英、数、国、漢だけ臨時試験が時々行われ、その成績は教室の入口に貼り出された。私はその時には何時も三番という好成绩であった。言葉を換えていえば、私の高中での生活は上級学校への進学のための勉強に終始していたのかもしれない。

私は家業がぐすり屋だった関係で、医者になろうと思つて、四年生の時、浦和高校の理科乙（ドイツ語専攻）を受験し、失敗した。五年生の正月、四年で商大に入った小坂橋正治郎君に勧められ、商大がどんな大学かも知らないまま受験して合格、以来今日までそのことが私の生涯の方向を決めているのは皮肉なことである。

（安藤輔取締役会長 32回）

●特別寄稿



思い出と近況

吉野 五郎

一、野球部開設の当時

大正十一年、南尋常小学校卒業、高中入学、入学式の伊藤校長の訓示はえんえん一時間半に渡り、終った時には話の内容の堅さに、木綿餅の着物の体がこわばっていました。野球部はそれ以前あったのですが前中との試合で応援ぐるみ大喧嘩をしたので伊藤校長がまかりならぬと一切禁止、ありませんでした。野球部のない中学は関東地方で珍しかったのですが、その年児玉校長が来られて野球部を再開後極めて行届いた理解を示されました。はじめ弱く高商に負け甲子園の前の鳴戸の全国大会の関東予選でもなかなか勝ちすめませんでした。応援は全校で熱心に、そうして宮部さんごちやんがすいらんかけの応援歌をつくり教えてくれました。児玉校長は剣道二段、柔剣

道が正課の時間でしたが校長自ら防具をつけて生徒相手に竹刀で教えました。県下の対校剣道大会が高中体操場で開催。選手五人、主将田島、先峰立花、勝ち進んで優勝戦となり、大将の田島選手、対手とつばぜりあいになり、右足で対手の足を払い倒す、倒して田島お面と行くところ、児玉校長が主催席から強い調子で声をかけ「田島遠慮せい！」厳格に命ず、田島選手は対手の起き上るのを待つて面をとり優勝。その時の児玉校長の武士道、礼節を知る態度には一堂の者声をひそめて心を打たれました。この一しゅんの状況の立派さは私の瞼の中にありありとあります。

二、村上、猪狩、土橋三先生

村上先生が二年のとき柴山先生に代つて教頭、修身の時間、仇名の如く剛直そのもので聞きこたえはあつたが終ると疲れました。その後兄弟の歌人の秀雄から先生がアラ、ギの歌人村上成之であり、ホトトギスの俳人蛸魚で鬼城と親交あり、格調の高い芸術家であることを沁々感じ、味わいました。而し詰衿服姿の謹直な教師には芸術家として香りを全く出しませんでした。人間内に蔵するものの多きを深さとする感じて、封建的の良きの武士道精神を感じます。猪狩梅三郎先生の漢文の講義は精神生活の基本となつて現在でも生き生

きとのこつております。土橋先生の地球の授業も印象的でした。三先生とも詰衿服姿で如何にも師という風格を忘れられません。三先生のうちに蔵するもの深く明治の封建的な良さを感じます。

三、校庭で負傷療養生活、中退

三年の頃漸く野球のあとを追つて陸上競技が行われる様になりました。朝礼の前校庭で距離を歩いて向いあつて砲丸を投げあつて練習に興じておりましたが、私の隣から投げた十二ポンドの砲丸がそれで私の後頭部こめかみに当る。勿論まともに当れば私は即死、強くかすつた程度、倒れて人事不省、周囲の見てる者は吉野は砲丸に当つて即死と感じ、評判になりました。何とか時間がかゝつて意識を回復、救急車などない時代のこと手押し車のベッドの車で新町の家に帰りました。療養生活、これがもとて留年したり、いろいろして四年のとき中途退学してしまいました。この砲丸負傷事件は私の生涯の運命を全く変えてしまいました。順調であるべき運命に物心両面から異常なショックを受け、何かそれから六十年人生の裏街道をずつとおる感じてです。

四、生涯の終りを前にしての近況

高中精神を生かして六十年。昭和十五年先輩の市長久保田さんに乞われて市助役に就任、警防団長就任。

昭和十九年北支派遣軍に応召八路軍に転戦、敗戦満州関東軍シベリア抑留三年。人生の前半を戦争と共に終了。商売に転向、群馬県繊維卸協組設立二十年間理事長、高崎卸商社街協組設立発起人代表。間屋町をつくる。中小企業運動に挺身、群馬県中小企業団体中央会副会長、高崎商工会議所副会頭等々歴任。国光株式会社設立現在売上年二百億円、会長。株式会社ダルマヤ小売チェーン社長。戦後生活と地方産業の育成に挺身、戦後四十年精一杯つとめてきました。

(国光興業取締役会長 26回)

●特別寄稿

S先生のこと

大林 勝典

「わくらばに人とうまれて、まなばでやはあるべき。しかにあれども、まなびたるがなかなかしらぬよりはあしきこともあり。おのがものしれるほどを見えしられんと云々」

とんでもない野暮な枕を振ってしまったものだが、これもゆきがかってやむを得まい。

私が、時折り、気まぐれにひろげる雑な本の中に、吉川弘文館から出ている『日本随筆大成』がある。唐木順三氏に言わせると、玉石混淆ならまだしも、殆んどが石ばかりの集まりなのだそうだが、玩物喪志の徒輩である私には、結構このシリーズが気に入っていて、南畝のものや、『昆陽漫録』『葦葭堂雜錄』『春波樓筆記』など、数寄者の文章を楽しむことがままある。

冒頭の文章も、このシリーズ中の一冊から引いたものだが、先日ふと出あって、これはと驚いた。藤井高尚『松の落葉』。この書名と文章には、どこかで出会ったことがあるぞ、と思った。退屈きわまるまでは言わないにしても、かなり退屈な国学者の文章につきあっていたのである。確かにどこかで出会っている。やがて、はっと気づいた。

それは中学二年の国語の時間に、S先生から教えられた文章であった。「ものまなびする人のよしあし」と題してあったが、そんなことはどうでもよかった。記憶がよみがえった時、なんととはなしに甘い感懐があった。そうして暫くは、焼ける前の学校の、中庭の梨の花や、武道場横の井戸や、渡るたびにきしんだ中央廊下のことなどを、持ちなく思い出していた。

ていた。

S先生は、私たちが入学した年に転任して来られて、私たち一年B組を担任された。授業にも、放課後の剣道にも、大変なはりきりようであった。年も若かったし、(現在の私の年齢の半分にもなっていないかった)剣道四段にしては、体も小さかった。熱心あまり、血気にはやったところもあったであろうし、なめられまわいという姿勢もあったのであろう。

生徒たちには、殊のほか厳しかった。その授業時間では、特に語彙や文法の教育に力を入れられて、私たちは暗誦を強いられた。厳しさに加えて、それがまた、不勉強な生徒たちの大いなる脅威であった。私もその一人であったが、今にして思えば、それは大変ありがたいことであつた。大げさな表現だが、私はその学恩に大いに感謝している。

岩波が新たに芥川全集を出した年に、「ある日の大石内蔵介」など、若いころの彼の作品を読み返したことがあった。その時感じたことだが、若いなあ、無理してるなあ、がんばれ、がんばれ、であった。かつて背伸びしながら読んだ芥川の背伸びしている姿勢が読みとれて、私は自分が当時の芥川の年齢をはるかに越えていることを改めて認識した。あのころのS先生もやはりそうだったのだらう。若かったのです。

漱石の『草枕』や蘆花の『自然と人生』などは、S先生に勧められて読んだものだったが、しかし、先生から、どんな本をどんな風に読んだらよいかとか、物事をどんな風に見つめ、どんな風に考えたらよいかなどということについては、殆んど教えていただけなかった。だが、本当にそうだったのだろうか。そう思っているのは私だけのことであつて、先生は熱烈に、そうした指導に当たられていたつもりでいたのかも知れない。

S先生を思うとき、きまって苦い思いをよみがえらせるものに『国体の本義』と『臣民の道』がある。あの氣狂いじみた小冊子である。先生は、国語の正課の授業にそれらを取り上げて、熱をこめて教えられた。先生の出自や出身校を思うと、あれは時勢に迎合してのことではなくて、先生にとってごく自然な道であつたのかも知れないが、残念なことであつた。あの方向ではない何かを、若いS先生から教えていただきたかった。毀譽褒貶まちまちの方ではあつたが、そして、私自身も随分と手ひどい批判を投げてきた一人であつたが、私はS先生が好きだった。それだけに先生の悲惨な最期はショックだった。葬儀の日以来、その墓所さえも知れぬままに、数年がたつてしまった。申し訳ないことである。合掌。

(自由業 45回)

今の日本は、飽食の時代といわれている。飢えに苦しむアフリカと比べて、それこそ天と地ほどの開きがある。家庭にも街にも食べものがあふれ、「グルメ」などという言葉も一般化して、美食の追求に余念がない人も少なくない。

確かに、私たちの食生活は豊かになっている。その昔は大変なご馳走だった肉や魚も特別な食べものでは

なくなった。大きさにいえば、昔のハレの食事が日常のものとなっている。便利にもなっている。多種多様のインスタント食品の出現によって、手間ひまかけずに一通りのものを食べることができるよう。豊かさに加えてこんなに簡単に食べものが口に入る時代は有史以来初めて、といってもいい過ぎではないだろう。

しかし、私たちの食べものの扱い

◆ずいそう◆



本ものの味を

伝えたい

羽鳥 昇兵

方、付き合い方となると、かなり大ざっぱで薄っぺらなものになっている。見た目の豊かさ、便利さにかまけて、何か大切なものを失ってしまった、という気がしないでもない。

端的な例が「オカアサンヤスメ」に代表される料理の手抜きである。

これは、今の子供たちの好きな料理食べものであるオムレツ、カレーラ

イス、アイスクリーム、サンドイッチ、焼きそば、スパゲティ、目玉焼きの頭文字を並べたもので、どれも簡単にできるものばかり。いわば現代版おふくろの味といったところだが、手抜きママへの皮肉がこめられている。

最近はずっと痛烈で、「ハハキトク」になっているともいわれる。こ

ちらはハンバーグ、ハムエッグ、ギョウザ、トースト、クリームスープである。

要するに、手間のかかる料理は一つない。インスタント食品のほんらん、忙しい現代生活のなせるわざといってしまうればそれまでだが、人の家庭での食生活も似たようなものである。魚といえば、刺身か干ものといった二極化の傾向がある。手間のかかる煮ものなどは、めったに食卓に上らなくなった。

総理府の家計調査を見ると、家庭の魚介類の購入量はここ十数年、多少の波があるものの減少傾向にある。しかしその中で、塩ザケ、干ものなどの塩干魚介だけは増えている。

塩干魚介は、もともと新鮮な魚が手に入りにくい、海から遠い地域での食べものである。それが今や、都会で消費量が増大している。ひと口にいて、その保存性、経済性、簡便性が受けたものだが、これは魚の消費で見る限り「都会の山奥化現象」といえる。

豊かさの中で、それだけ食事の身が貧しくなっているというわけである。こうした例はまだまだある。

みそ汁のダシは、化学調味料で取るのが当たり前だし、おひたしにかけるカツオ節はパック入りの削り節が普通である。いろいろなものの煮汁の残り煮るオカラ料理にも、とんとお目にかからなくなった。

削り節などというものは、極端に言えばカンナくずみたいなので、味もつけもない。これに比べ、ちやんと削ったカツオ節はそれにしようゆをたらしただけで、一本立ちのおかずになるほどうまい。おひたしにかける量くらいはたかが知れている。ちよつと削る手間をかければ本ものの味が楽しめるはずである。

刺身をよく食べる割には、これも今や当たり前みたいになった粉ワサビやチューブ入りのワサビも気に入らない。はつきりいって、これは偽ものである。粉ワサビの原料はワサビ大根で、本もののワサビではない。こう書くと、カツオ節もワサビも

本ものは値段が高いという声が上がるともいえない。しかし、どれも一度に大量に使うものではない。家族一同で外食することを考えたら、十分お釣りがくるくらいの値段である。

削り節や粉ワサビを本ものと思いついて子供や若者に、たまには、本物の本ものの刺激を与えるのは、決してムダなことではない。偽もののばかり与えていたのでは、本ものの味がわかるはずがない。

食べものは文化である。創造も大事だが、祖先から受け継いできた本ものの味を失うことは、文化の大きな損失にはかならない。

(読売新聞婦人部長 51回)

私の回想記

●回想

柔道と絵と詩

中野 完二

高高を卒業してから三〇年経つ。昭和三〇年卒業だから計算しやすい。三〇年も過ぎれば、子どもが高校を卒業するようになって不思議ではない。

今年の一月に開かれた第八三回高同窓会は、私たちの第五四期が当番をつとめた。同期生がずいぶん集まったのには、びっくりした。幹事役の努力と呼びかけのせいだが、三〇年も経てば、懐旧の情が沸くためでもある。

同期生が何人も母校の先生をして、いるというのに、私自身、卒業後一度も母校を訪れていないという有様でも、同窓会に出ると、歳月が一気に縮まるような気にさせられた。

昭和二十七年春、入学。前年一月の火事で校舎は炎上したが、竣工した木造新校舎に入ったのだった。

願みれば、私の高校時代は勉強よりも、柔道と絵と詩に明け暮れていたという思いが強い。それも青春をエンジョイするという類いでなく、

やや青暗い、鬱々たる表情をしていたのではなかったか。

柔道は、最初は高崎公園内にあった武徳殿で稽古していた。翌年、スプリングのきいた真新しい柔道場ができ、冬木金雄君、竹田（早見）章治君（弁護士）らと稽古に励んだが、うまくならなかつた。左眼の近視も進んでいた。だが、柔道は、後年、太極拳を友とし、その普及に努めることになる素地となったように思う。絵は盛んに描いた。満足にカンパスが買えず、芯地を買って自分で作ったこともあった。井上房一郎さんが、ばらの手入れのかたわら、花やくだものを持って来てくださったものもありがたかつた。仲間で県展に出したりした。けれども、今見ると暗い絵ばかりである。

昨年、塚田とほる先生を囲む会が高崎であり、昔の美術部の先輩、仲間、後輩にたくさん会った。彫刻家の半田富久君はじめ明るい顔が多かつた。

（その5）

詩は、二、三年生の頃、「二行詩」を書いていた。文芸部発行の雑誌に二回くらい載せた。今、手許になく、どんな詩を作ったか忘れてしまった。高中の大先輩、大手拓次の詩集は繰り返し読んだ。

●回想

校歌翠巒によせて

生方 将夫

昭和二十九年四月、我々は希望に胸ふくらませて入学式に臨んだ。

校庭に整列する折に今は亡き小柄な富田マンキー先生の大きな声にびつくりしたものでした。講堂に入りこれ又今は亡き田中悦平校長の切々たる講話と、ブラスバンドの演奏する校歌翠巒に感動したあの日を今も忘れる事はない。個性溢れる先生方と共にクラブ活動、学業に励んだ三年間はまさに私の青春時代であった。入学式に始まり野球場で、壮行会、前高との定期戦で、そして卒業式で唱った翠巒は私の永遠の愛唱歌である。高高在学中もそうであったが、今でも翠巒を唱うと酒の席でさえも戦慄を覚えるのは何故だろうか？

四年前の春、甲子園初出場の折マン

絵も詩も、のちに絵本や婦人雑誌の編集をするのに役立った。

田中悦平校長の「三F精神」を中沢清君、新井洋治君と鳥川畔で語り合ったことも忘れ得ぬ思い出である。（文化出版局第二編集部長 54回）

モススタンドで唱った翠巒は終生忘れられない思い出の一つである。

昨年京浜同窓会の真下副会長が亡くなられたが、こよなく翠巒を愛された先輩とお聞きしている。入院中声が出ず御見舞に訪れた同窓の方々に病室で翠巒を唱ってもらい、又亡くなられて出棺の折も参列の同窓生が翠巒でお送りしたと御聞きし、万感胸に迫る想いが致します。

我々五十六期生も芥川賞候補になった金広正君、野球部のマネージャーであった田島公之君、応援部にいた池田宏君、いつもにこにこしていた井出富夫君等、分っているだけでも八名が既に此の世に居ない。彼等の短い人生の終りの前に一瞬でも翠巒のメロディーが胸中をよぎったて

あろうことを信じて疑わない。

ここに改めて物故された皆様の御冥福を祈ってやみません。

現在の校歌は昭和三十二年、我々が卒業した年に創立六十周年を記念して制定されたと聞くが毎年野球場のスタンドや同窓会新年総会で聞くうちに大分馴染んで来た。私も今は歌詞を見なくとも唱える様になった。さすが草野心平先生の作詞、仲々良い歌詞で味わい深いものがある。

私もこれからの人生を今迄以上に誇り高い母校高々と応援歌、校歌を

●回想

八年後の「高々」

橋爪恒二郎

同窓会報への執筆依頼が来て、久し振りに高々の三年間を振り返った。押入れの中から、思いがけなくメンコやペーゴマが出てきたような、妙に懐かし、また恥ずかしい、何とも言えない表わせない感慨。随分昔のようないふふするし、あれこれ思い出すと思えてくる。いずれにしても、自分自身もまわりのすべてのものも、輝いていた。

入学して間もなく、二、三年生のジーパン姿に感動した。そして最初の授業が観音山への花見、というのにビックリ。そんな訳で、次第に、高

寄る辺に生きて行きたいと思う。

創立九十周年も間近いが、伝統ある母校高々が、翠嶺の響きも高らかに、百周年、二百周年と永遠の隆盛を祈念して止まないものである。

来年の同窓会新年総会は五十五期の先輩方が幹事で着々と準備を進められて居る様です。我々五十六期は九十周年を迎える六十二年の幹事です。同期一同精一杯頑張る決意をして居ります。同窓会の皆様くれぐれもよろしく御願い致します。

(マジョーレ経営 56回)

高生。になっていったのを思い出す。

一年のときは、木造校舎であった。二、三年生が新しく完成した鉄筋の校舎。古い木造校舎に古い牛乳の自動販売機があり、上手にボタンを押すと、二、三本出てきたりする。それでクラスの英雄になったりできた、たわいもない年頃だった。

二年になって例の新校舎に入る。高々の伝統と誇りのためか、既にして校舎の中は使用十年という様相であった。僕たちの学年もその伝統を受け継いだのは言うまでもない。例外的に清掃をしたことも書いておかねば。校長室当番があったのは、確

卒業生の作品紹介①

彫刻家

半田 富久

撮影・猪俣重喜(47回)



つくば 85エキスポセンター正面におかれた「ゆるぎ石」

か二年のときだ。(もともと、当番が校長室へ行かなくて、しばしば校内放送で呼び出しを受けてはいたが)三年生。最上級生。恐いものは何もない学年。慈光通りにオープンしたマクドナルドに、授業中クラスの注文をまとめバイクで買いに出かけたこともあった。そんなことが嬉しかったのかと思うと、やはり八年の年月を重く感じとってしまふ。

●回想

以上が夕方までの回想。もう一つ、夕方からの強烈な思い出について触れなければなるまい。

忘れ得ぬこと

「学ぶに遅すぎるといふことはない。」
(セネカ)

高校課程の勉強に一抹の不安を抱きながらも、向学の心已み難く、高崎高校・通信制課程に入学したのは四年前、「不惑」の年を半ば過ぎてからのことでした。通信制課程での四年間の体験は、私にとって貴重なものであり、充実したものでもありました。日の浅い回想の一頁の中に鮮明な印象として刻まれているのは「入学式」であり、「卒業式」でありました。それは終生を通じて忘れ得ぬ大きな節目でもありました。

ールを追いかけた。今でも月に二度、会社近くの体育館で汗を流すというていたらく。別に好きでもないき、早く辞めたい、と、三年間。結果的に、良かったのかなあ、と思える戦績は残った。関東大会Bブロック優勝。インターハイ松江大会出場。これらの遠征は、けっこう楽しかった思い出だ。

(俳電通勤務 77回)

山下勇次郎

高校課程の勉強が出来るという喜びと期待、そして入学迄の空白期間から来る学習への不安感とが入り混じって臨んだ入学式。

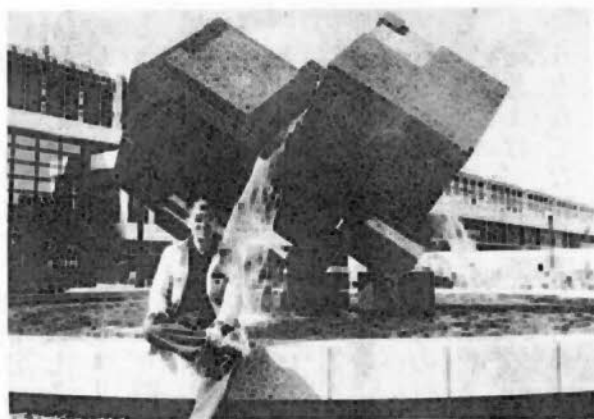
「高校の勉強は難しい。とりわけ通信制課程での勉強はそれ以上に難しい。しかし決して不可能ということはない。本当に意欲をもって取り組むならば可能性は無限に有る。生徒に対応する学校側の姿勢、学習に対する先生方の意気込み、そのいずれも、全日制課程に劣るものではない。」と仰られた校長先生の言葉が、揺れ動いていた私の心の力強い支えとな

今年つくばで開催された科学万博で話題を呼んだもののひとつに、エキスポセンター正面におかれた大きな石の彫刻がある。名づけて「ゆるぎ石」という。約四五トンの巨石が子供の指一本でゆらりと動く。

作品は半田富久氏(五十四期)構想から五年、制作に三年を要したこの「ゆるぎ石」は世界でも類をみない作品である。

半田富久氏は高々卒業後、芸大に進み、現在は日本を代表する彫刻家の一人である。

新幹線高崎駅前の上毛三山のモ



高崎駅前(東口)のモニュメント「上毛三山」

ニユメントの作者としても知られている。

り、陰に陽に今日までの励ましとなっていました。

四年間、それは決して平坦な道ではありません。家業を、家族を、健康を、と様々な理由の付けられる障害は、「学習」という事実の前には、無意味なものであるとわかったのも通信制ならではの思いました。在学中、さほど成績が良かったとは思われぬこの私に「答辞」の榮譽を与えられたことは、方に青天の霹靂にもたとえられる驚きであり、感激でもありました。

私のどこに、答辞を読むのに相応しいものがあつたのか、私の何に對して答辞を読む名譽を与えられたのか、自問自答を繰り返した卒業式までの

日々。感激の中に答辞を読むあいだその背中に多数の方々や家内の祝福の視線を感じながら読み終えた時、支えてきてくれた多くの人の心が伝わってきました。式後、「良かったです。」との校長先生の一言は、私の高校生活の有終の美を飾るのに相応しいものとして生涯忘れることはいでしよう。

「答辞」を読むことの榮譽は、単に私だけのものではなく、通信制に学ぶ多くの人に贈られるものとして受け止め、それが学習する立場の一つの指標としてあることを心から期待している昨今です。

(山下サイクル 通27回)

今年の春伴が高校に上り、夏になつたら親父に死なれた。世代がちょうど一交替して、私が高崎高校へ入ったときの親父の年令になつたわけだ。頑健な親父にしてあれから三十年だつたとなると、自分はとてもそんなには……なんぞと感懐めいた思いにふけているところへ同窓会から一報到来、「論壇」に何か書けという。もとより大上段に振るかぶれ

るような議論が語学教師の日常性から出てくるわけはなし、在校中は盲滅法な受験勉強しかしていない人間に疎な思い出のあらうはずもない。しかし折角だから高崎高校について一つだけ書いておきたいことがある。一年生の夏休みだったが、図書館へ日参して小野圭を読み上げ、いささか自得して休み明けに登校してみると、「善の研究」、「三太郎の日記」と

「親馬鹿ちゃんりんの志操」



井田 進也

いった名だたる哲学書・文学書を三、四十冊は読んだかなあといつて澄ましている豪の者がいて、私は脳天に鉄鎧を下ろされる思いがした。そんな奴に出くわすただけでも高崎高校は行った甲斐があつたと思つてゐる。卒業後は長らく何か思ひべきもののように在校中の思い出を振り払つたものだが、近來ヤキがまわつたというべきか、とかく周囲の者に、天

下の高崎高校を振りまわすようになっていたらしい。親父の葬式に來てくれた同僚が、散々きかされたから行つてみたが、お前のところは駅から五、六分て草っ原があり（こないだブルトローザーが引っくり返してゐた）、家の脇を川が流れていて（ただの用水だ）ふるさとを感じたといつた。不動産屋の広告みただが、いわれてなんだかほろりとした。

高崎高校についてはそれだけだ。今年はそんなわけが親父の新盆になつてしまつたので、盆の三日を高崎の家に座つて過ごした。米客を待つあいだ八月十五日の夕刊だつたらう、披いてみると、歴代首相が執拗に試みながらついに果さなかつた靖国神社公式参拝が行なわれたと報じている。これはえらいことになった。いうまでもなく靖国神社は、過ぐる太平洋戦争において兵士の士気を鼓舞し、戦争遺家族を慰撫し、また新たな兵士の供給をはかるために不可欠とされた宗教施設だつたはずだ。憲法の戦争放棄原則がなしくずされて軍事費突出が取沙汰されている折も折、いまだ政教分離の原則に触れる首相の公式参拝とは何を意味するのだろうか。それは、国民の一人一人が今後靖国に参拝ないし遙拝することをも促し、率先してその範を垂れるものにほかなるまい。

最近の報道ではまた、文部省が小中学校での国旗掲揚・国歌斉唱の指導を強化する方針であるという。国論が急速に一つの方向に収束されてゆくのを感じるが、果して将来、靖国参拝を肯んじない者が、非国民をささやかれ、国旗・国歌にかんする文部省の指導に従わない校長が職を追われるような日がやつて来ないといえるのだろうか。

歴史は繰り返さない、いまの日本が過ぐる戦争のようなバカな真似をするはずがない、と人はいふ。そうかもしれない。全面核戦争の時代に首相が公式参拝したからといって、にわか青年が兵役にとられ、外国の、もしくは外国への侵略の犠牲となつて靖国に祀られる、といった氣遣いはないかもしれない（いまの青年に帝国軍人並みの活を入れようというのがドダイ無理なはずだ）。政府や防衛関係者がかつての軍部のようになかにかかつて国民を威圧したり威嚇したりすることもおそらくはないであらう。にもかかわらず、自由と繁榮に押れたかにみえる現下の日本が、かつての愚かしい戦争に突入したときと同じ、いつか来た見覚えのある道を辿りはじめているというの、どうしたわけだろう。この道はどこへ通じるのか。

疑わしきは罰せずは刑法の鉄則だが、疑わしいものは警戒しろというのが日常生活の鉄則だ。スリがいるときいたら財布をしっかりと抑え、大風が吹いたらコートを吹きとばされないようにする。最近の一連の動きに照して身のまわりでいちばん危ないのは誰かと問えば、もちろんそれは私ではなくて、私の伴だ。といつて憲法前文ではないが政府の行為による戦争の惨禍に遭わせてたまるものかと思えば、私は断固たる親馬鹿ちゃんりんでなければならぬ。

（東京都立大学助教授 56回）

同窓会だより

榛名地区

同窓会だより

土岐 正

榛名地区に同窓会支部が出来たのは約三十年程前の昭和三十年頃で旧群馬郡室田町、久留馬村と旧碓氷郡里見村が合併して、新しい榛名町が誕生した年です。

その母体となったのは旧里見村の高中同窓会支部で、大正時代に発足し、初代支部長は五回卒の富沢与曾五郎氏、二代目は八回卒の里見村長の清水武十郎氏、三代目は小生で、終戦後復員早々支部長に推薦され、同窓会支部の運営と母校との橋渡しをして来ました。母校が火災に遭った時は逸早く駆けつけ、内藤校長を見舞ったこともありました。

町村合併直後、在町の同窓の有志と相談し、榛名地区同窓会を結成しました。

本会の会則は、第一条、本会は会員の交誼を厚くし、兼ねて母校教育の振興充実に協力するを以て目的とする。

第二条、本会の会員は母校卒業生

及びかつて在学したもので、本町在住若しくは在職している者を以て組織する。

役員は副会長、理事、幹事、監事、庶務会計、顧問はすべて三地区（室田地区、里見地区、久留馬地区）から一名乃至三名宛選出されています。

現在榛名地区の同窓生は昭和六十年一月現在で百七〇名です。浜名敏白果議（45回）清水三郎町長（38回）石川忠三助役（34回）渡根木八郎収入役（37回）石井清二郎教育長（31回）新井充国書館長（41回）で役場の主要ポストを同窓生で占めております。同窓会の総会は母校同窓会総会の一週間後に概ね毎年開催し、母校から校長、教頭並びに校内幹事の諸先生が出席し、母校の現況を話して戴き、母校と同窓会との絆を一層密接にし、和気あいあいと交わり時の過ぐるも知らぬ程で、最後は「翠巒かげを」を謳歌して終宴しております。今年と同窓会長の原一雄さんも出席して下さいました。

24回の広瀬謙先生はいつも出席しております。今年も女性の出席者もおりました。

数年前迄は母校の在町PTAと合同で懇親会を開催し、生徒の進路指導をも行って戴き、後輩の育成に多

大の益があったと思いました。然し懇親会の席で、同窓の父兄は問題ないのですが、一般の父兄にとっては、何かしつくりゆかない点がありましたので合同の懇親会は中止してしまいました。

母校の体育館建設には地区同窓会が一丸となって協力し、毎月積立てして目標の金額を寄付いたしました。又母校創立八十周年記念事業にも協力して来ました。

母校の野球部が甲子園に出場した時には、喜んで百万円近くの後援資金を提出しました。

母校が発展することは私達同窓生にとって無上の喜びです。

そのために微力ではありますが、我が榛名地区の同窓会は今後とも会員相互の親睦を図ると共に、母校教育の振興に協力してゆきたいと思っております。

母校の隆盛を祈ります。

（群馬県医師会名誉会長 30回）



京浜同窓会の

近況

上利 嘉野

京浜高崎高校同窓会の大きな行事である昭和六十年度の総会並びに新入会員歓迎会は、五月二十九日、千代田区平河町の日本海運倶楽部で行われた。雨模様にもかかわらず、現在会員六十一名、新入会員六十八名が出席し、ほぼ例年どおりであった。本部から原会長、水穴校長を始めたくさんの先生方がご列席になり、久し振りにお目にかかる母校の先生方と新入会員、一年振りに再会するOBの皆さん方、それぞれの話題に花を咲かせ、歓談のひと時を過ぎた。なかでも新入会員に対する諸先輩方の祝辞や激励の言葉はたいへん貴重なものであり、学ぶにつけ、遊びにしろ、やがての就職への心構えなどに大いに役立ったことと思う。

昭和五十二年までは新入会員歓迎会を春に、総会を秋に開催していた。春の会ではゆつくり話し合うことができないうOBの意見があり、出席率も悪くまことに不人気であつ

た。それに加えて歓迎会に出席した新入会員の翌年以降の出席がほとんどなく、歓迎会の意義も薄らいていった。赤字運営もからんで、一部の幹事から歓迎会は廃止したらとの意見も出たくらいである。しかし歓迎会は廃止すべきでないとの大方の意見と、本部からの強い要望もあり、存続することになった。苦しい財政を切り抜けるため今年二回の開催を、総会並びに新入会員歓迎会として年一回春に開催することにし、今日にいたっている。

総会と同時に同窓会誌「翠翹」を発行し皆様にお渡ししている。今年で三十一号になるが、いつもは六百部のところ今回は一千部出している。皆さん方のご協力により原稿の集まりもよく、内容も年々充実している。特に編集・印刷などについて毎回上毛新聞社にたいへんご協力いただいていることを感謝する。

「翠翹」の冒頭に「科学万博つくば85三人の男たち」と題して猪俣君(47期)が次のように書いています。

福島公夫君(46期、前科学技術庁研究調査局長)は科学万博つくば85のそもそもの仕掛人であり、今回政府館総館長の職にある。つくばエキスポセンター正面に巨石がおかれている。石の彫刻である。製作者は半田富久君(54期)、高崎駅前のもニュメントの作者で知られている。名づけて「ゆるぎ石」という。この「ゆ

るぎ石」の出版に協力をおしまなかったのが岸芳彦君(46期)で、製作にゴーサインを出したのが前記福島君である。——この製作過程を追ったのが写真家の猪俣君である。

北ゲートから入った内側に群馬館があり、この展示プロデューサーが熊野卓司君(66期)である。群馬館に「ウーパールーパー」が福田元総理の事務所から慎重に運ばれたものである。——猪俣君は「エキスポ85にかかわっている三つの個性は同窓である」と結んでいるが、このエキスポ85にかかわった同窓生がほかにもたくさんいるのは確かである。エキスポ85主会場の展示施設はすべて撤去されるが、エキスポセンターの「ゆるぎ石」は永久に保存されるという。

本部では五十八年に名簿を発行しているが、五年間隔とのことで、京浜ではその中間をねらい、今年末発行予定準備を進めている。

近ごろあちこちで盛んに幹部の若返りが行われているが、当会も役員の若返りが話題になっている。若い活力で会の運営に当たるのはまことに望ましいことで、本部の総会運営が良いお手本を示している。しかし会長はそれほど若返らなくていいし、京浜高同窓会のシンボルでなければならぬという意見もある。

(勝ジャパンハーグ勤務 34回)

三八会

クラス会便り

清水 幸正
重田 精一

昭和十四年三月卒業、旧制高崎中学校第三十八回のクラス会は、三八会という。

上和田台上の旧校舎(現高崎市立第一中学校)に入学し、昭和十三年の師走、乗附原頭の現校舎に移転、翌春卒業、つまり、旧校舎最後の在校生であり、新校舎最初の卒業生となったクラスであります。

卒業後、それぞれの志望に従って進むべく巣立っていった我々の行手には、苛酷な戦争がまちうけており、凍てつける北の海から黄塵吹きさぶ中国大陸さらに南溟の島々などに転戦した仲間たちは、無限の可能性を秘めた若き命を、やたら戦場に散らし、あるいは病魔に倒れるなど四十五名の若い生命を失ってしまった。また、戦後、それぞれの地域社会で、また業界で優れた指導者として活躍していた仲間たちが、忽然としてこの世を去ってしまう者十指におよび、一五〇名中、一クラス相当分の仲間を失ってしまったことになりま。かえすがえすも残念至極にて言葉ありません。

卒業後四十五年を経た本年二月十

六日、友相集い、高崎市中紺屋町玉田寺にて、鈴木隆澄師により追悼回向の会を催し、今は語るに術なき物故諸賢の御霊を追慕しつつ、往時を懐古いたしました。

追悼会終了後、岡源にてクラス会開催。在校時のクラス担任であられた恩師、市川三郎先生、また東京からわざわざお越し頂いた阿部広司先生の御臨席を頂き、参加者四十二名、市川先生、阿部先生ともに本年は七十五歳におなりになるとのことですが、大変お元気にて、クラスの仲間の方が、先生らしくみえたりする有



高中三八会(昭和60年2月16日於・岡源)

様、両先生より、生活における健康の貴さ、また人生を一生懸命生きぬくこと、自らきりひらく努力などのご挨拶を頂き、お話の間に次第次第に四十五年前のクラスの中で、顔を真赤にしながら熱烈に講義をし、絵筆をふるわれていた両先生のお姿が浮び上ってくるのも不思議であり、人生はやはり情熱と努力であるときえ感じさせられました。

我々の当時は三クラスであり、両先生とも一人の担任は古賀新先生でありました。今回も古賀先生御来高をおまちいたしておりましたが、胆石手術後の為またの機会とのことにて、高崎時代をなつかしく思い出されておられるとともに、我々のクラス仲間が戦争で四十五名なくなつたことを覚えておられ、一人一人の思い出まで手紙で頂き感激いたしました次第でありました。

九州においでの方賀先生に寄せ書との話がもちあがり、阿部広司先生の上毛三山のペン描きに、市川三郎先生のお言葉を中心に、参加者全員二枚の色紙にそれぞれ古賀新先生宛の署名をいたし、クラス会当日のスタンプを添えお送りいたし、先生から大変なつかしく、いつまでも眺めておられた由を伺いました。

三先生とも昭和十四年に高崎中学校を去られておられますので、現在の同窓会名簿には御住所がのつておりません。

市川三郎先生は庭球部、阿部広司先生は美術部、古賀新先生は柔道部を指導されておられました。市川三郎先生は高崎市教育長をなされ、高崎に在住されておられますが、三先生の御住所を次に記しておきます。

◎市川三郎先生 高崎市双葉町二三

一二五

◎阿部広司先生 東京都文京区小日

向二一七一

◎古賀新先生 直方市山部西御館町

母校のますますの御発展を祈念いたしております。

(清水 群馬大学教授

重田 重田医院院長 38回)

「北本すいらん会」

原田 修

二年前、高々同窓会の事務局からかねて頼んでおいた同窓会名簿が届いたことがある。ある日、ひまにまかせて部厚い名簿をめくっていると、いろいろな名前が目にとまった。私は、第五十五回(昭和三十一年)卒業であるが、名簿の中には卒業以来同期生はもろろん、京浜同窓会で面識をもち、親しくおつきあひいたっている人達もいる。さらに、(私がバレー部に所属していたことから)あの先輩、あの後輩はいまどこでど

うしているかを知りたくて名簿をめくっていくのも心楽しいことであつた。そうこうするうち、名簿の中に(私の第二のふるさと)北本の活字が目にとまり、私以外にこ、北本に住む高々同窓生が十八人も居ることがわかつたのである。私は早速、北本市在住の同窓生の名簿を作り、相手の迷惑も考えず、夜中に十七人のお宅に電話をかけるわけだが、つまるところ、皆さん心よく応じてくれたし、ともかく一度顔合せをしようということになった。

以上が、「北本すいらん会」が生れた経緯であるが、第一回の同窓会は同年十二月十三日、盛大に開催された。皆さんはじめて顔を合わせるわ



北本すいらん会(昭和58年11月13日)

けだが、話題が心のふるさと、高々、高崎時代のことになればお互い相うちとけるのに時間はそんなにかからないというものの、年齢差を超えて楽しい歓談が続いた。最後は、佐藤隆志君(六十回、応援部)の音頭で校歌、級会の歌を合唱したが、私たち上州健児の唄声はいつまでも北本の街中にひびき渡った。二回目も昨年十一月に開催され前回にもましてにぎやかな会合になったのも当然の成りゆきであつて、今こうして原稿を書いているながらも、今年はどうしようかと考えている私である。

「北本すいらん会」の紹介であるが、会員十八名のうち、吉田さん(病床にあるとか、早い回復をお祈りします)桜井さん(現会長)のお二人はすでに功なり名を挙げ、自適の境遇にあり、あとの十六名は現役の社会人として、そして北本市民として毎日元気に活躍している。

最後になりましたが、この紙面をかりて高々同窓会々員の方々にお願ひがあります。「北本すいらん会」をさらに大きな輪にすべく、主に高崎線の大宮―熊谷に在住の会員のご参加を期待しています。こんな小さな北本の街にも十八名の同窓生が居るのです。あなたの街にもきつと多くの同窓生がいるはずですよ。どうかもう一度名簿をめくってみることをおすすめします。

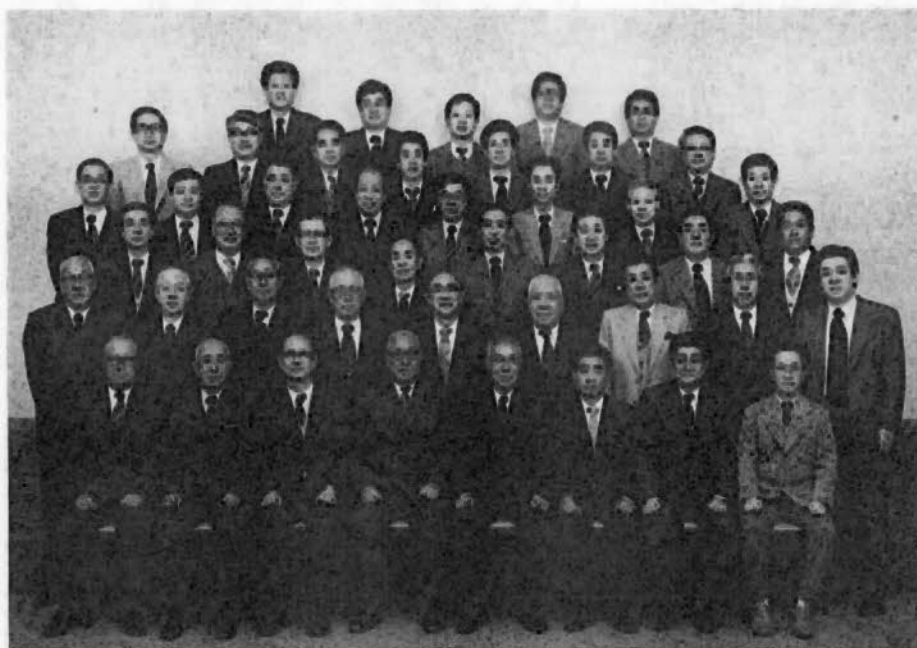
(鉄道弘済会勤務 55回)

同窓会報第十八号に財団法人設立経過報告を記しましたが、幸いに、多くの方々の御理解と御協力を得て、その名も、財団法人翠戀育英会として、一月十九日付で群馬県教育委員会指令教部第一号をもって、設立許可を頂戴し、同月二十六日開催の第八十三回同窓会総会において役員名簿、評議員名簿を添えて設立報告をさせていただきます。

二月七日 前橋地方事務局高崎支局において設立登記を完了し、ここに

財団法人 翠戀育英会 発足

田 中 順



に、群馬県内の高等学校生徒に対して奨学金の給付等、教育奨励に関する事業等を行い、もって本県教育振興及び人材育成を図ることを目的とした財産の集合体であり、財産の独自性と管理の継続性を確保する同窓会のアイデンティティとしての懸案

の育英奨学財団が発足することができました。これも、ひとえに起案から、設立発起人会を経て、設立登記に至るまで、足かけ三年の間、お力添えいただいた関係各位の御援助の賜であり、紙上を借りて深甚なる感謝を申し上げます。

次いで、二月二十三日 第一回理事会において、継続審議されていた奨学金給付規則の制定、井上房一郎、横山徹、中野敏宗、水穴再喜の四先生を顧問に推戴し、六十年代事業計画、予算書の再確認の議決をいただきました。

三月五日 財団は同窓会と一心同体であり、財団評議員会の機能を兼ねている常任理事と設立の窓口になった県教委の方々にお出向きいただき四十七名の出席を得て、盛會裡に財団設立祝賀会を開催できました。

四月二十四日 第二回理事会及び評議員会を開催し、五十九年度事業報告、収支決算書、理事の追加選任等の議案につき、議決承認されて、森川正三郎（24回）議長のもとで、四月赴任の高橋千代三母校事務長を理事として選任いたしました。

この間、地方のいち高校の同窓会が育英奨学財団法人を設立した事は、稀有なこととして二、三の新聞にも取り上げられ、四月二十一日には、NHK第一放送「郷土の話題」リレーニュースに放送されました。

五月九日 奨学生選考委員会を開催し、申請者十八名を経済的理由を重視し、特に母子・父子家庭を優先させ、成績は本人の努力によって向上する可能性が高いので、それ程、重点をおかないという基本方針のもとで選考を行いました。

五月十三日 奨学生採用通知書伝

達式が挙行され、三年生の松田秀行、駒口雅智、二年生の滝野修司、山崎浩、丸岡仁一、一年生の鈴木勝広、上原哲朗、桜井健一、宇佐美広行の九名の諸君を翠戀育英会第一回奨学生として採用いたしました。

当日、NHK前橋放送局の取材があり、五月二十一日、午後一時二十五分の関東甲信越ネットワークにて放映されました。VTRが学校に保管されておりますので折があればご覧下さい。

五月十九日 寄付金第一号として栗本正彦会員（29回）より、寄付金を頂戴し、受入れさせていただきました。厚く御礼申上げると共に、御意志を尊重し、大切に使用させていただきます。

高橋事務長の理事就任により、法人の運営実務も円滑に行われ、奨学金の給付も実行され、子供達に大いなる福音になっております。

財団設立の趣旨を御理解いただいた栗本先輩を嚆矢とした御寄付は、これからも更に、母校愛、郷土愛の発露として陸續として御願ひいただきますように切望いたします。財団といえども健全な管理運営を計り、向学心に燃える多くの子供達に一臂の力添えが出来るように努力いたし度いと存じておりますので、倍旧の御支援を御願ひ申し上げます。

（翠戀育英会常務理事

田中齒科医院 51回）

運動部報告

ラグビー全国大会で善戦 4競技関東大会へ出場

弓道、空手道が永らく同好会として活動してまいりましたが、その実績が高く評価され、このたび部として認められ、今後の活躍が期待されます。これで運動部は十七部となります。切実な現状を報告しております。

昨年末から花園で開催されました高校ラグビー全国大会に、本校は七度目の出場、二回戦で強豪天理高校と対戦、敗れはしたものの終始互角に戦い、スタンドを大いに湧かせてまいりました。諸先輩の絶大なるご声援を心から感謝申し上げます。また、一月十五日国立競技場で行われた高校東西対抗戦に、本校から三名が選抜され大活躍したのをはじめのケースでした。

六十年代県高校総体では不覚をとりましたが、バスケット部・陸上部・軟式庭球部・水泳部の四部が関東大会で健闘致しました。鳥取県で行われた国体へ、サッカー部鈴木博司君（三年）が群馬県チームの一員として奮闘しております。

新チーム編成後、各部とも全力を尽してまいりますのでご声援の程お願い申し上げます。

各部主な戦績は次のとおりです。

野球部

秋季大会4位、夏季大会2回戦、春季大会2回戦。

ラグビー部

全国県予選優勝、全国大会2回戦
新人戦3位、県総体3位、国体予選2位。

サッカー部

新人戦ベスト8、県総体3位、全国県予選ベスト8。

バスケット部

新人戦準優勝、県総体準優勝、関東Bブロック3位、全国県予選3位、県強化大会準優勝。

バレー部

新人戦2回戦、県総体ベスト16、全国予選ベスト8、国体予選ベスト16。

軟式庭球部

県総体、国体ベスト16、個人井田、岩瀬組準優勝、岡部・伴田組5位以上関東大会（石和）出場、新人戦団体2位、個人岡部・伴田組3位。

陸上競技部

県総体1000m佐藤正紀2位、800m武井義之1位、4×100m5位（田中、関口、日隈、佐藤）4×400m6位（武井、関口、高橋、日隈）以上関東大会（笠松）出場、学校対抗100m佐藤正紀3位、新人戦走り跳1位日隈6m91、三段跳2位日隈13m31。

水泳部

県総体1500m田胡（1年）2位、関東県予選1500m田胡（1年）3位、関東大会出場。

柔道部

新人戦ベスト8、関東新人県予選ベスト8、県総体7位、全国県予選2回戦。

剣道部

一年生大会3位、県総体16位、全国県予選3回戦。

硬式庭球部

新人戦、県総体出場。

卓球部

新人戦3回戦、県総体2回戦、全国県予選3回戦、新人戦ベスト16。

弓道部

新人戦出場、全国県予選団体3位。

空手道

新人戦、県総体出場。

登山部

県総体出場。

応援部

各種競技会へ応援。

スキー・スケート部

各種競技会出場。
（運動部長 中原射鹿止 55回）

翠 巒 文 庫

卒業生の方々の著書で学校へ寄贈して下さったものを図書室に展示しております。それを翠巒文庫と称しております。

書名 著者

東海道遠州見付宿 田中友次郎17回
海図のない航海 中曾根康弘35回
証言インドネシア独立革命 西嶋重忠28回

豊田一男詩集 豊田一男26回
日本経済の秘密 関根 望46回
与蘭会報113 新井哲夫21回

帆船時代 田中 航52回
北に南に 山崎 一23回
神と社とその出典 市川 清25回

アフガンハウンド 吉本嘉規35回
もう一つのフィリピン戦記 大沢 清23回
くぐり遺歌集 岡田豊彦30回

碓氷の城 山崎 一23回
黒岩達介のスキークリニック 黒岩達介52回
新雪の滑り方 黒岩達介52回

労働と管理のはざま 小山長四郎18回
純信和尚影と遺稿集佐藤達全他65回
英会話事典 松本 亨30回
松本亨英作全集110

第39回 高高・前高定期戦

圧倒的な差をつけて
V4 達成!



十月四日に行われた第39回高前定期戦本大会は、圧倒的な差をつけてV4を達成しました。
九月十七日に行われた水泳大会では三学年制覇。また駅伝、綱引きでは、常勝前高の伝説をくじき、高々増々意気盛んになりました。
金剛力を身につけんと練習に余念のなかった綱引き。素質十分な三年

競技種目	学校	陸上競技	バスケット	バレーボール	軟式庭球	卓球	駅伝	綱引き	玉入れ	水泳	ラグビー	サッカー	柔道	剣道	野球	硬式庭球	弓道	小計	総合
		前高	前高	前高	前高	前高	前高	前高	前高	前高	前高	前高	前高	前高	前高	前高	前高	前高	
一般対抗	前高	6	4	3	6	4	3	3	3	0	/	/	/	/	/	/	/	32	50
	高	0	5	6	3	5	6	3	6	9	/	/	/	/	/	/	/	43	
部対抗	前高	0	0	0	6	0	/	/	/	/	0	6	0	0	6	0	0	18	97
	高	6	6	6	0	6	/	/	/	/	6	0	6	6	0	6	6	54	

〈通算〉前高13勝 高々21勝 3分け 2中止

紅昏(歌集)

原一雄 29回

群馬県古城址の研究補遺篇上・下

山崎一 23回

新六法昭和54年版

永井憲一 49回

詩集野の少年

高橋秀幸 66回

続神と社とその出典

市川清 25回

英書の読み方

市川清 25回

松本享私の英語メモ帳

市川清 25回

英文・ユーモア作文集

市川清 25回

学生との人生問答

市川清 25回

逃亡者

市川清 25回

キリスト教入門

市川清 25回

英語の読み方

市川清 25回

英語の読み方

市川清 25回

英語の読み方

市川清 25回

英語の読み方

市川清 25回

英語の読み方

市川清 25回

英語の読み方

市川清 25回

英語の読み方

市川清 25回

翠巒文庫

英語演説(増補版)

松本享 30回

英語と私

松本享 30回

英語で考える

松本享 30回

英語のイントネーション

松本享 30回

スベリング面白さ

松本享 30回

ある学長の死

松本享 30回

書く英語(基礎編)

松本享 30回

書く英語(応用編)

松本享 30回

松本享英語詩集

松本享 30回

英会話ことばの花かご(熟語編)

松本享 30回

これを英語で何というか(単語編)

松本享 30回

ザ・セブン・スターズ

松本享 30回

書く英語(実用編)

松本享 30回

英語で考えるには—そのヒケツと練習—

松本享 30回

FRIENDSHIP 1 カセットテープ

松本享 30回

キスト113

松本享 30回

これをやさしい英語で何というか

松本享 30回

松本享私の英語メモ帳

松本享 30回

英文・ユーモア作文集

松本享 30回

学生との人生問答

松本享 30回

逃亡者

松本享 30回

キリスト教入門

松本享 30回

英語の読み方

松本享 30回

英語の読み方

松本享 30回

英語の読み方

松本享 30回

英語の読み方

松本享 30回

英語の読み方

松本享 30回

英語の読み方

松本享 30回

英語の読み方

松本享 30回

英語の読み方

松本享 30回

英語の読み方

松本享 30回

英語の読み方

松本享 30回

英語の読み方

松本享 30回

英語の読み方

松本享 30回

英語の読み方

松本享 30回

英語の読み方

松本享 30回

英語の読み方

松本享 30回

最近の進学

状況について

今春の大学入試は所謂「ゆとり」の新教育課程による最初の入試でした。「現役不利」と言われる中で行われた入試での高生生の合格状況は下表の通りであります。

中学時の「ゆとり」(特に、英語、数学の授業時数の減少)による高生新生の学力低下、大学進学希望者の増加、中高一貫教育の私立進学校や予備校の台頭、等々の諸情勢を考慮に入れば、高生生の健闘ぶりもまずまずであったと思います。これも偏に学校長はじめ全職員が一丸となって、学力向上対策にとりくみ、進路指導に向けて、鋭意努力を続けている賜と言えるでしょう。旧課程の頃には考えられなかった補習や課外授業、カリキュラム上の工夫等により、学力の向上、それに伴う現役合格率の向上を目指して、全職員が生徒に負けず頑張っています。

現在、三年生は来春の入試に向けて最後の追い込みをかけているところですが、

62年度からは、また入試制度が若干変わります。共通一次試験科目の減少と国公立大学の複数受験等が見込まれています。

このように、めまぐるしく変化す

る諸情勢の中で、進路指導の難しさを痛感している昨今ではありますが、後輩の進路指導の為に全力をつくし、

たいと思います。来春の高高健児の躍進を期待しつつ、

(進路部長 森慶寿 52回)

進学状況(全日制)

() は現役

種別合計(全日制)

大学	年次	58年	59年	60年	大学	年次	58年	59年	60年
北大	大	3(1)	4(1)	6(2)	高経大	大	18(8)	24(9)	31(9)
東北大	大	13(7)	24(14)	17(4)	早大	大	57(8)	89(19)	60(13)
東京大	大	10(6)	8(3)	7(4)	慶応大	大	27(7)	44(12)	35(12)
一橋大	大	3(1)	3(1)	3(2)	中央大	大	33(6)	50(15)	35(8)
東工大	大	6(2)	6(2)	1(0)	明治大	大	68(7)	58(14)	63(9)
千葉大	大	5(1)	8(1)	6(2)	日本大	大	25(5)	34(5)	38(10)
京都大	大	3(0)	6(2)	2(1)	上智大	大	16(5)	13(1)	17(4)
新潟大	大	11(5)	11(3)	14(9)	法政大	大	32(3)	18(2)	27(6)
筑波大	大	5(3)	7(5)	8(2)	立教大	大	17(1)	19(1)	16(3)
金沢大	大	4(3)	7(2)	1(0)	東京電機大	大	7(1)	7(2)	6(0)
東外大	大	6(1)	1(0)	3(2)	東京理大	大	22(4)	52(7)	32(6)
群馬大	大	46(28)	63(34)	60(29)	芝浦工大	大	5(2)	5(2)	4(2)
横国大	大	13(6)	5(2)	5(2)	成蹊大	大	6(0)	7(0)	6(4)
静岡大	大	2(0)	2(2)	1(1)	学習院大	大	1(0)	7(1)	9(1)
山梨大	大	1(0)	1(1)	2(2)	青山学院大	大	15(3)	15(6)	16(5)
埼玉大	大	2(2)	8(3)	6(4)	武蔵大	大	2(1)	4(0)	1(0)
信州大	大	0(0)	7(2)	6(2)	同志社大	大	8(5)	5(2)	4(2)
横浜市大	大	0(0)	2(0)	3(2)	立命館大	大	4(2)	3(1)	10(3)
					その他		166(36)	220(55)	190(44)

進学率	現役進学者数	卒業生数	総計(延数)	D短大、各種他	A+B+C	C私立	B公立	A国立	大学別
合格者数	合格者数	卒業生数	総計(延数)	D短大、各種他	A+B+C	C私立	B公立	A国立	大学別
36.3%	138	401	662(170)	10(5)	652(165)	476(86)	26(8)	150(71)	58年
45.3%	180	400	847(232)	13(3)	834(229)	589(131)	45(10)	200(88)	59年
40.6%	152	405	751(211)	14(4)	737(207)	513(113)	47(15)	177(79)	60年

翠巒文庫

- 紅葉鮎 五十嵐徹夫 24回
- 母よ百まで生きて 近藤宏二 27回
- 医学放送三十年の歩み
- 生活革命・玄米正食法 石田英博 54回
- 工業英語事始 三好研一 42回
- 青春をスキーに 黒岩達介 52回
- イギリスの底力 土井泰彦 51回
- 西洋館のげんきちゃん 須藤元夫 43回
- 身体づくり、いのちのトリム自護体 鈴木元一 53回
- 教科書問題を考える 永井憲一 49回
- 教師と学習指導要領
- 国民の教育権
- 法学概説
- コンメンタール教育法
- 憲法学の基礎知識
- 教育行政と教育法の理論
- 教育権
- 教育法学の展開と課題
- 教育法学の目的と任務
- 軍隊の思い出 大野高義 38回
- 鋼索の製造 西岡多三郎 20回
- 鋼索の研究
- 幻の素粒子 本間三郎 53回
- 素粒子を光で見ると 永遠の歌・わが秀歌鑑賞
- 保母詩集 原一雄 29回
- 雪とこぶしの唄 門倉 訣 52回

(吉永哲郎 54回)

昭和59年度 高高同志会経常会計報告
(昭和59年1月～12月)

収入の部

費目	59年度予算	実収入	備考
繰越金	462,535	462,535	
入会金	850,000	858,000	全日制 407 通信制22
維持費	4,300,000	4,048,000	
利息	30,000	31,636	
合計	5,642,535	5,400,171	

支出の部

費目	59年度予算	実支出	備考
会議費	800,000	449,140	理事会、幹事会、総会
祝賀費	300,000	419,760	祝金、卒業ケース等
饗別費	150,000	252,000	転出職員へ
慶弔費	80,000	55,000	花輪代
通信印刷費	600,000	190,470	ハガキ、切手、振込用紙
旅費	120,000	76,500	京浜同志会出席等
総会通信印刷費	1,100,000	1,014,650	総会通知等発送
同志会報費	900,000	800,000	同志会報印刷
同事務費	500,000	489,686	人件費
同志会長賞	100,000	36,500	
補助費	600,000	600,000	翠梧体育会、図書館補助
雑費	50,000	21,960	
子備費	342,535	100,000	
同志会基金へ		500,000	
次年度へ繰越		394,505	
合計	5,642,535	5,400,171	

経常会計・特別会計について上記のとおり報告します。

昭和60年1月23日

高高同志会会計 志村 紀三男
設楽 春樹

監査の結果、上記報告に誤りのないことを認めます。

昭和60年1月23日

高高同志会監査 須永 孝
石井 敬之助

昭和60年度 高高同志会経常会計予算案
(昭和60年1月～12月)

収入の部

費目	昭和60年度予算	備考
前年度からの繰越金	394,505	
入会金	850,000	全日制405
維持費	4,200,000	通信制20
利息	30,000	
合計	5,474,505	

収入の部

費目	昭和60年度予算	備考	○増 △減
会議費	800,000	同	
祝賀費	400,000	○ 100,000	
饗別費	150,000	同	
慶弔費	80,000	同	
通信印刷費	300,000	△ 300,000	
旅費	150,000	○ 30,000	
総会通信印刷費	1,100,000	同	
同志会報費	900,000	同	
同事務費	500,000	同	
同志会長賞	100,000	同	
補助費	600,000	同	
雑費	50,000	同	
子備費	344,505	○ 1,970	
合計	5,474,505		

昭和59年度 高高同志会特別会計(同志会基金)

(昭和59年1月～12月)

収入の部

費目	収入	支出
繰越金	5,525,851	なし
利息	208,576	
寄付金	300,000	
59年経常会計より	500,000	
合計	6,534,427	

残高合計 6,534,427円
(高崎信用金庫西支店定期預金)

※寄付金は下記の3氏によるものです。

安藤 賢一氏 (29回) 羽鳥 治良氏 (30回) 重田 精一氏 (38回)

第八四回高々同志会 新年総会へのお誘い

同志生の皆様には、お元気にお越しのことと存じます。

さて、同志会の新年総会の設営を、各期ごとに担当する様になって、来年度で六回目となります。年々回を重ねるごとに、出席者が増え、盛況になって来たことは大変喜ばしい事です。来年もこの記録を更新する様、当番期一同努力して居ります。

しばらくぶりですが同志生の顔のしわや、髪の色には、お互いに歳月の経過を感じさせますが、話す笑顔の中にふと懐かしい学生時代の面影を発見して、タイムトンネルを潜った様に、一時身も心も青年に還って談笑出来るのも、同志会の最高の魅力の一つだと思います。

来年一月の新年総会には、お誘い合せの上、大勢の同志生のご出席を、当番期卒業生一同、心からお待ちしております。

■期日 昭和六一年一月二五日(土)

■時間 午後三時

■場所 高崎ビューホテル

■会費 四、〇〇〇円

(当番期代表 石田安利 55回)



事務局だより

◎母校創立九十周年記念事業の実行委員の委嘱も行われ、その活動が開始されました。主な役員を紹介いたします。
(敬称略・順不同)

◇会長 原 一雄

◇副会長 柴山大五郎 小山 裕一

◇特別顧問 岡本 正巳 児玉 貴

◇実行委員 長野 幸国 福田 一郎

◇事務部 小林 康男 経徳 弘康

◇委員 水穴 再喜

◇委員 柴山大五郎

◇委員 小山 裕一

◇委員 重田 精一 茂木 三郎

◇委員 国峰 善次郎 鳥屋 昇

◇委員 末村 重雄 馬場 晋

◇委員 松浦 幸雄

◇委員 長野 幸国

◇委員 柴山 雄二

◇委員 春木 裕男

◇委員 長野 幸国

◇委員 柴山 雄二

◇委員 春木 裕男

◇委員 長野 幸国

◇委員 柴山 雄二

◇委員 春木 裕男

◇委員 長野 幸国

◇委員 柴山 雄二

◇委員 春木 裕男

◇委員 長野 幸国

◇委員 柴山 雄二

◇委員 春木 裕男

◇委員 長野 幸国

◇委員 柴山 雄二

◇委員 春木 裕男

◇委員 長野 幸国

◇委員 柴山 雄二

◎校庭の公孫樹も落葉をいそいで、思案の季節へ向かおうとしている中、第十九号が仕上がります。御多忙の折、原稿をお寄せくださいました方方に深くお礼申し上げます。
(本部幹事・校内幹事)

高崎 高校同志会報 No. 19
昭和五十九年十一月三十日発行

編集 本部幹事会
印刷 出版あさを社